実践のまとめ（中学校２学年　英語科）

授業公開日　令和３年９月 17 日　第５校時
指導者　燕市立吉田中学校
教諭　中川　大地

１　研究テーマ

「学びに向かう力、人間性等」の涵養に着目した単元構成
～言語、言語外目標の二連アプローチと振り返り活動を通じて～

２　研究テーマについて

(1) 研究テーマ設定の意図

新学習指導要領解説総則編(2018：以下、解説総則編と表記する)には、「中央教育審議会答申(2016)においては、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要であること、こうした力は全く新しい力ではなく学校教育が長年その育成を目指してきた「生きる力」であることを改めて捉え直し、学校教育がしっかりとその強みを発揮できるようにしていくことが必要とされた。また、汎用的な能力の育成を重視する世界的な潮流を踏まえつつ、知識及び技能と思考力、判断力、表現力等をバランスよく育成してきた我が国の学校教育の蓄積を生かしていくことが重要とされた。」と述べられている。これを基に、答申においては、「生きる力」がより具体化され、「生きて働く『知識・技能』の習得」、「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成」、「『学びに向かう力・人間性等』の涵養」の三つの柱に再整理された。

解説総則編によれば、今回の改訂では、「全ての教科等の目標及び内容を『知識及び技能』、『思考力、判断力、表現力等』、『学びに向かう力、人間性等』の三つの柱で再整理した。」とされている。しかし、中学校学習指導要領外国語を見てみると、「学びに向かう力、人間性等」に当たる目標は「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。」との記載があるが、「内容」に関しては記載がない。松沢ら(2018)は、「小中高の外国語の新学習指導要領は『学びに向かう力、人間性等』について、（中略）その『目標』を示した。しかしその『内容』は示さなかった」と指摘している。

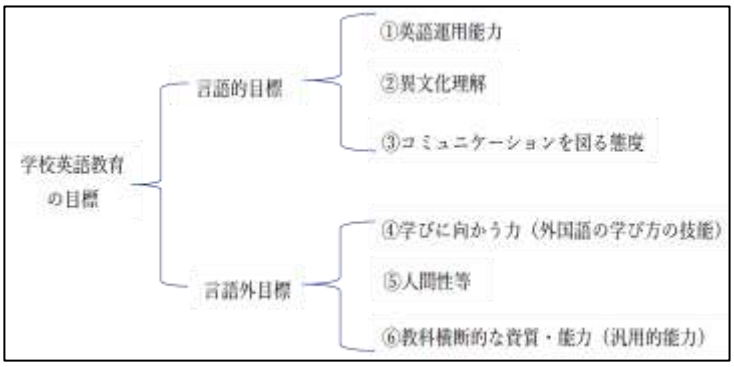
また、解説総則編において、「資質・能力の三つの柱の一つである『学びに向かう力・人間性等』には、①『主体的に学習に取り組む態度』として観点別評価（学習状況を分析的に捉える）を通じて見取ることができる部分と、②観点別評価や評定にはなじまず、こうした評価では示しきれないことから個人内評価（個人のよい点や可能性、進歩の状況について評価する）を通じて見取る部分があることにも留意する必要がある。」と言及されている。これに基づいて、中学校では、①の部分と②の部分とを峻別して指導と評価に当たることを考えている。

校内の教科部会などでは、指導と評価の参考とするために、国立教育政策研究所(2020：以下、参考資料と表記する)を活用しているが、この中には、解説総則編と同様に①と②についての記述が

あるが、②についての記載はほとんどない。

「参考資料」内では、②の部分は「感性、思いやりなど」といった見出しがつけられているが、これをどのように育み、評価するかについては曖昧な部分が多いように感じる。松沢（2021）は、「『参考資料』は『人間性等』の個人内評価を十分に紹介しておらず、この資質・能力の育成目標は『絵に描いた餅になりかねない』。同じことは『学びに向かう力』にも当てはまる。」と指摘している。そこで松沢（2021）は、学校英語教育の目標を表１のように分類し、「学びに向かう力・人間性等」を涵養するために、「二連アプローチ」で「言語的目標」と「言語外目標」を共に育てることを提案している。さらに、「二連アプローチは外国語教育に適し、そこでの学びに向かう力や人間性等の伸長が、学力も向上させる。」と述べている。

表 1. 学校英語教育の目標の分類（松沢 2021）



本研究では、松沢(2021)を援用し、「二連アプローチ」によって、「学びに向かう力・人間性等」として育むべき力の側面をはっきりとさせ、その評価の方法を提案する。

⑵ 研究テーマに迫るために

①外国語学習における「言語外目標」の具体の設定

本研究では、「参考資料」が「主体的に学習に取り組む態度」と「感性、思いやりなど」としているうちの、「感性、思いやりなど」の部分を表２のように設定する。

表２：外国語学習における言語外目標の具体

外国語学習における言語外目標	学びに向かう力	・自己調整力 ・粘り強さ
	人間性	・礼儀　・優しさ　・真理の探究 ・思いやり　・感謝　・他者貢献
	教科横断的な資質・能力（汎用的能力）	・メタ認知　・複眼的思考　・相手意識 ・他者との協調　・合意形成 ・リーダーシップ、フォロワーシップ

②二連アプローチの目標設定と振り返り活動

○単元全体、授業において、言語的目標、言語外目標の設定を行い、これらを生徒と共有する。単元全体や毎時間の評価規準において、観点別評価における「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の他に、個人内評価における「学びに向かう力、人間性等」を位置付け、教師が指導において、これら四つの規準を意識するとともに、生徒にも、四つの規準に基づく到達目標を示し、意識させる。

○生徒に振り返りシートを配付し、言語的目標、言語外目標に関して、一定の期間ごとの自己評価を行わせ、力の向上を目指す機会とする。

③生徒同士による相互評価活動

○パフォーマンステストにおいては、ルーブリックを全体で共有し、練習段階において生徒同士の相互評価活動を行う。練習段階における形成的評価を仲間から受けることで、課題を克服し、改善させる意識をもちながら意欲的に練習に取り組ませる。

○適切に評価するために、相手のスピーチを真剣に聞かせ、翻って自分自身のパフォーマンス向上のヒントを得られるようにする。

○聞き手に評価されるという非日常的な状況は、多くの話し手に緊張感を生むこととなる。そのため、思いやりや他者貢献の点において、「良い聞き手を目指す」意識を学級全体で共有し、話し手・聞き手双方の資質・能力を向上させる。

④教科横断的な課題設定

○特に言語外目標の側面の育みを目指し、１年間の学習の中で複数回、教科横断的な学習を仕組む。

○本単元では、総合的な学習の時間に作成した職場体験学習のレポートを基に表現活動を行う。生徒は総合的な学習の時間にまとめの活動を行っているので、英語の授業内で多くの時間を割くことなしに、メモ程度を作成すれば発表を行うことができる。

○本年度行った職場体験学習は、個別に事業所を訪問する形式ではなく、オンラインにて学級共通で行った。体験が共通しているため、必要とする語彙や表現を他の生徒と相談しやすく、積極的なアドバイスするなど、学び合う機会が生まれやすいと考える。

⑶ 研究テーマにかかわる評価

以下の３つの観点から評価を行う。

○生徒の自己評価と振り返りの記述

・単元末の生徒の自己評価において、言語外目標（「学びに向かう力・人間性」）の項目でＡ評価が８割以上

・ 振り返り用紙の記述において、自分の変容を感じることができたなどの記述があるか。

○ＡＬＴによるパフォーマンステストの評価

・パフォーマンステストの「主体的に学習に取り組む態度」の項目でＡ評価が８割以上

○授業アンケート

・「授業の中で、自信をもって英語での表現活動に臨んでいる」の項目において、肯定的な回答への変容が見られる。

・「コミュニケーションにおいて、話し手・聞き手の立場の時に大切にしていることは何ですか」の質問に対し、生徒の記述に変化がある。

３　単元と指導計画

⑴ 単元名

○オンライン職場体験での学んだことをＡＬＴの先生に伝えよう。

Unit Activity 「あなたの職場体験は？」（NEW HORIZON 2　東京書籍）

⑵ 単元の目標

①職場体験を通じての学びと自分の将来について、相手を巻き込む工夫をしながら、ＡＬＴの先生に発表することができる。【言語的目標】

② 友人のスピーチに対して、積極的に反応するなど、安心感を与えるような聞き方をすることで、積極的に表現できる環境づくりに貢献している。【言語外目標】

③ 適切な相互評価を与えることで、相手の気付きや学びを促そうとしている。【言語外目標】

⑶ 単元の評価規準

観点別学習評価			個人内評価
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	感性、思いやりなど（学びに向かう力、人間性）
既習表現を活用して、職場体験の学びについてスピーチ文にまとめ、正しい発音で発表することができる。 【ﾊﾟﾌｫｰﾏﾝｽﾃｽﾄ】	職場体験での学び、自分の将来にどのように生かすかについて適切に英文にまとめ、伝えることができる。 【ﾊﾟﾌｫｰﾏﾝｽﾃｽﾄ】	聞き手を巻き込む工夫をしながら、相手意識をもって発表しようとしている。 【行動観察】 【ﾊﾟﾌｫｰﾏﾝｽﾃｽﾄ】	・友人の発表に対して、安心感を与えるような聞き方をしようとしている。 ・適切な相互評価を与えることで、相手の気付きや学びを促そうとしている。 【行動観察】 【振り返りの記述】

⑷ 単元と生徒

〇単元について

本単元では、職場体験での学びとそれを将来にどのように生かすかについて、発表メモを活用してスピーチ活動を行う。生徒は６月にオンラインでの職場体験を行い、総合的な学習の時間でまとめ活動を行ってきた。その中で、「人はなぜ働くのか？」というテーマについて考えを深め、１枚のレポートにまとめた。しかし、今回のオンライン職場体験では、クラスで共通の事業所を体験したため、「学びを他者に伝える」という機会を十分に設けることができずにいた。そこで、本単元では、「ＡＬＴの先生がレポートを目にして、その内容に興味をもっている。」という設定のもと、課題設定を行った。単元の始めに、ＡＬＴから生徒にその思いを伝え、単元のゴールに向けての目的意識と見通しをもたせ、学習を進めていく。「ＡＬＴに伝える」という目的のもとで学びを整理し、伝わるように工夫をする中で、自身の将来や今後の中学校生活の充実にどのように生かすのかについて考えさせる機会にしたい。

単元のゴールである、メモを用いてのスピーチ活動に向けて、帯活動を通じて段階的に力を高めさせたい。帯活動では、数種類のモデル文のなりきりスピーチを行う。生徒は、４段階のレベルから選択し、繰り返し行う中で徐々に表現の負荷を高めていく。繰り返しパラレルな文に触れることで、自身のスピーチにも活用可能な表現や、スピーチの文構造を体感し、自身の発表の際には、メモのみでスピーチが行えるようにしたい。

○生徒について（男子１７名　女子１６名　計３３名）

学級としては「誰かのために自ら考え行動するクラス（他己中）」を目指している。授業でも全体のために発言したり、仲間に積極的に教えたりする姿が少しずつ見られるようになってきた。英語でのコミュニケーション活動でも、男女関係なく積極的に交流できる生徒も多く、前向きに学ぶ雰囲気がある。一方で、まだ「自分だけよければ」という姿勢の生徒も少なくない。本単元のスピーチ練習での、聞き手として相手のスピーチを支える（相手に支えられる）経験、また相互に評価し合いながらより良い発表を創り上げていく経験をとおし、学習集団の一員として、周囲に貢献しようとする姿勢を身に付けさせたい。

⑸ 単元の指導と評価の計画（全６時間、本時４時間）○…参考　●…記録に残す

課	時	主な学習内容	知	思	主	備考
3 評価	6	【パフォーマンステスト】 ・ＡＬＴの先生に職場体験での学びについて伝える。 ・単元の振り返り、授業アンケート（事後）	●	●	●	「主体～」の評価は主にパフォーマンステストで行うが、帯活動における生徒の意識の変容をよく見とり、評価の参考にする。
2 練習	5	・リハーサル、友人との相互評価活動		○	○	
	4 本 時	・帯活動 ・発表用メモをもとに発表練習を行う中で、自身の発表内容や表現を整える。 ・友人との相互評価活動		○	○	
1 学習	3	・帯活動 ・must、must not の導入と練習 ・タブレットを活用しながら、発表に必要になる単語を調べ、発音等を確認する。 ・モデル文から、自身の発表に活用できそうな表現を探す。			○	【have to、must】これらは、本来次の単元 Unit４で学ぶ文法であるが、今回のゴール活動で活用できるため、順番を変えて本単元で先に導入する。
	2	・帯活動 ・have to、don’t have to の導入と練習 ・総合のレポートをもとに、発表で伝える内容を整理する。			○	
	1	・単元の目標と流れの確認 ・自身の単元目標設定、記入 ・帯活動の導入 →発表についてイメージをもつ			○	【帯活動】 発表のモデル文について、４段階でなりきりスピーチを行う。
	0	・ある人物の将来の夢について６文以上で書く。 （夏テスト英作文課題）	●	●		前単元の Writing 評価

４　本時の展開

⑴ ねらい

【言語的目標】・職場体験での学びと自分の将来について、聞き手を巻き込む工夫をしながら、メモをもとに友人に発表することができる。

【言語外目標】・友人の発表に対して、安心感を与えるような聞き方をしようとしている。

・適切な相互評価を与えることで、相手の気付きや学びを促そうとしている。

(2) 展開の構想

帯活動では、４段階の難易度から選択し、モデル文のなりきりスピーチ活動を行う。単元をとおして行う中で、スピーチの構成や表現のイメージをもたせたい。その後、発表用メモを作成し、それをもとに繰り返しペアで発表練習を行う。多くの表現に触れる中で、自身の発表内容を整えさせたい。そして、練習の後半では、発表に対しての相互評価活動を行うことで、内容面以外も意識させ、さらに発表としての質を高めさせたい。発表内容が固まっていない練習の始めや、自身の発表が友人に評価される練習後半など、話し手として緊張や不安を感じる機会が多くあると考えられる。授業をとおして、聞き手として、それを支える存在になることを意識させたい。話し手聞き手相互の努力によって、積極的に新たな表現に挑戦できるような練習環境をつくっていきたい。

(3) 展開

時間	学習内容・学習活動	教師の働きかけ	○留意点　□評価
導入 (15)	**１．帯活動** ・モデル文のなりきりスピーチ ・４段階の難易度から選択し、徐々に上げながら繰り返し行う。 ・話した内容をノートに書く。 **２．本時の目標の共有**	・発音等のサポートを行う。 ・良い例を全体に紹介しながら「聞き手を巻き込む工夫」を促す。	□聞き手を巻き込む工夫をしながら、相手意識をもって発表しようとしている。
	・聞き手を巻き込む工夫をしながら、スピーチ練習することができる。（言語的目標） **・良い聞き手として、相手に安心感、アドバイスを与えようとする。（言語外の目標）**		
展開 (35)	**３．発表用メモ作成** ・前時までに整理した発表内容をもとに発表用のメモを作成する。 ・メモをもとに個人練習 **４．練習①** ・発表用メモをもとに、ペアを変えながら繰り返し練習を行う。 ・必要に応じて、メモの内容を修正したり、書き足したりする。 **５．ルーブリックの確認**	・メモの例を示す。 ・生徒の使用する表現について、質問に答えたり、助言をしたりする。 ・最初のうちは、思うように表現できない生徒がいることが考えられる。定期的に練習を止め、表現方法の整理、確認を周囲とする時間をとる。 ・聞き手に話し手への配慮を促す。 ・ルーブリックを示し、ポイントを再確認する。	○発表に必要な単語等は事前に調べておく。 ○帯活動のモデル文での表現を発表に活用させたい。 □安心感を与えるような聞き方をしようとしている。 ○聞き手には、「話し手を支え、不安を軽減させる」という意識をもたせたい。 ○具体的な姿をイメージさせたい。

	<u>５．練習②→相互評価活動</u> ・ポイントを意識して再度ペア練習を行う。 ・相互評価シートに相手の評価＋励ましのコメントを書いて渡す。 ・相互評価の中で出た課題を改善できるように意識する。 <u>６．Writing</u> ・メモをもとに話した内容をワークシートに書く。	・ペア練習の様子を観察し。全体に関わるポイントは、練習を止めて伝える。 ・良い聞き手の姿や、適切な相互評価の様子についても具体的に紹介する機会をつくり、最後まで良い雰囲気で練習できるようにする。 ・書くことをとおして、改めて発表内容と使う表現の整理をさせたい。	□適切な相互評価で、相手の気付きや学びを促そうとしている。 □聞き手を巻き込む工夫をしながら発表しようとしている。 □職場体験での学びを自分の将来について、適切に伝えることができる。
終末 (5)	<u>8．振り返り</u> ・本時の達成状況、気づき、次回への課題を振り返り、シートに記入する。	・本時全体を振り返り、良かったところや次回への課題等について伝える。	○言語的目標と②の言語外目標の両側面から振り返り、形成的評価の機会とする。

(4) 評価

①職場体験での学びを自分の将来にどのように生かすかについて、適切に英語で伝えることができる。(思考・判断・表現)

②聞き手を巻き込む工夫をしながら、相手意識をもって発表しようとしている。
(主体的に学習に取り組む態度)

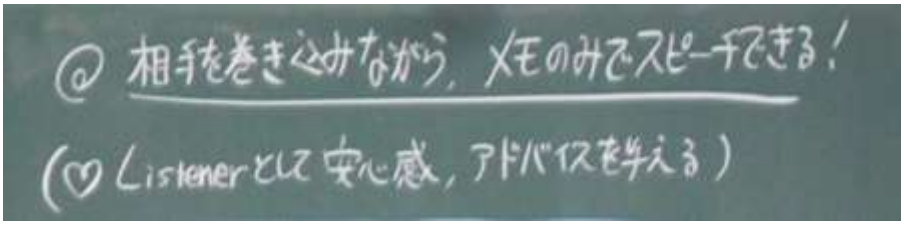
③友人のスピーチに対して、積極的に反応するなど、安心感を与えるような聞き方をすることで、積極的に表現できる環境づくりに貢献している。また、適切な相互評価を与えることで、相手の気付きや学びを促そうとしている。(学びに向かう力・人間性等) ※個人内評価

５　成果と課題

(1) 指導の実際

①言語外目標の設定

単元、授業において、言語的、言語外目標の設定し、それに対して振り返りを行った。授業では、以下のように◎で言語的目標、♡で言語外目標を提示した。また、本単元では、生徒がイメージしやすいように、言語的目標を「パフォーマンス目標」、言語外目標は「Good Listener 目標」とした。

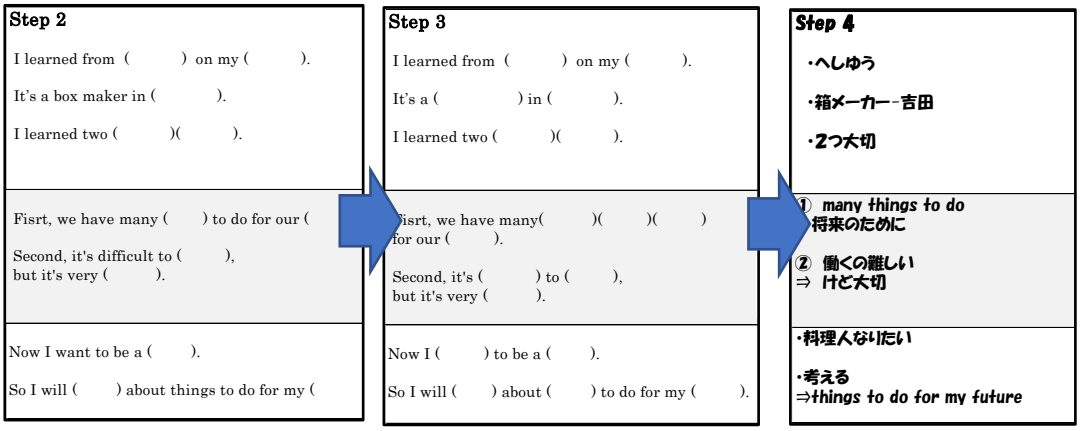


授業での言語的、言語目標の提示

②帯活動と発表メモ作成

帯活動では、以下のようなメモを用いて、数種類のモデル文のなりきりスピーチを行った。帯活動を通じて、徐々に負荷を高めながら十分なインプットを行った後、自身の総合のレポートをもとに、伝える内容の整理を行い、発表用のメモを作成した。メモの情報量は帯活動の Step4 程度とし、活動の中で体感した文構造や表現を自身の発表にも生かせるよう促した。

帯活動の様子



帯活動のシート（Step2～4）

③相互評価活動

パフォーマンステストの練習において、実際のルーブリックを用いて生徒同士での相互評価活動を行い、お互いの発表についてコメントを交換した。相互評価活動は、帯活動について（２時）、発表練習について（４，５時）の計３回行った。相互評価活動は、繰り返しペアで練習する途中で行い、それを受けて改善する機会を授業内で設定するようにした。

(2)　研究テーマにかかわって

２(3)で示した研究テーマにかかわる評価について検証を行う。

〇生徒の自己評価と振り返りの記述

・単元末の生徒の自己評価において、「学びに向かう力・人間性」の項目でＡ評価が８割以上

Ａ評価の割合は 84%であり、わずかであるが達成された。一方で、自由記述欄によると、「適切な評価を与える」という点に困難さを感じ、ＢやＣ評価を選択した生徒が多いようだった。「安心感を与える聞き方」はできたものの、相手に気付きを与える評価、アドバイスをすることには難しさを感じたようである。

・ 振り返り用紙の記述において、自分の変容を感じることができたなどの記述があるか。

単元末の振り返りによると、以下の通り、自己の変容についての記述が確認された。話し手、聞き手双方の立場で、相手への敬意を払いながらコミュニケーションを図ろうと努力していた様子が伝わった。

＜話し手としての記述＞
・Do you know this company？などの質問をして、相手を巻き込む工夫ができるようになった。また、ジェスチャーやアイコンタクトによって、発表内容の良さがより伝わると感じた。
・アイコンタクトは、ただ見るのではなく、「優しい目」でするのが大切だと思った。
・強調したい部分の音量や、間の長さなど、相手がつまらなくならないような話し方を気を付けるようになりました。
・最初の方はあまり相手の反応を見ずに話し続けていたけれど、今は相手のリアクションを見ながらゆっくり伝わるように話すようになった。

＜聞き手としての記述＞
・聞く時は、アイコンタクトが相手に安心感を与えるためにとても大切だと改めて感じたから、後半は特に気を付けて練習できたので良かった。
・友達とアドバイスやポジティブコメントなどをし合って練習をしたら、自然と言えるようになったり、アイコンタクトをして話せるようになったので良かった。
・リアクション、質問が発表する時に欠かせないものになり、積極的にできるようになった気がする。
・相手により安心感を与えられるような聞き方を意識しました。後半の方では、アドバイスや質問を使うようにしました。
・反応の時のリスナーの表情も大事なんだなと気づきました。
・アイコンタクトやあいづちをすることで、いい雰囲気がつくれるからとても大事だなと思った。
・今までと違って、あいづちや繰り返しのリアクションができて良かった。また、自然とアイコンタクトができたので、雰囲気の良い練習環境をつくることができたと思います。
・相手から、「ここどうやるの？」とアドバイスを求められるのは嬉しいと思うようになった。

○ＡＬＴによるパフォーマンステストの評価（６３名実施）

・パフォーマンステストの「主体的に学習に取り組む態度」の項目でＡ評価が８割以上

パフォーマンステストの「主体的に学習に取り組む態度」の項目におけるＡ評価の割合は86%であり、Ａ評価８割以上は達成された。パフォーマンステストのルーブリックは以下の通りである。テストでは、ほとんどの生徒が、話し手として即興での質問など、聞き手を巻き込む工夫をしながら発表を行っていた。

	発音（知・技）	内容（思・判・表）	Good Speaker（主）
A	正しい発音で発表している。	①「学んだこと」を２つ以上 ②「これからしようと思うこと」の２つの内容が十分に伝わるスピーチである。	①アイコンタクト ②「相手を巻き込む工夫」の２つを十分に満たしたスピーチであった。
B	２，３か所、理解しにくい発音がある。	①②のどちらかの内容が不十分であった。	①②のどちらかが不十分であった。
C	理解しにくい発音が多くある。	①②のどちらも十分に伝わらなかった。	①②のどちらも不十分であった。

○授業アンケート（各６１名実施）

・「授業の中で、自信をもって英語での表現活動に臨んでいる」の項目において、肯定的な回答への変容が見られる。

授業アンケートは、１学期末（７月）に１回目、本単元後（10 月）に２回目を実施した。１回目から２回目での回答の変容は以下の通りであった。

項目　①…あてはまる　②どちらかといえばあてはまる	１回目	２回目
授業の中で、自信をもって英語での表現活動に臨んでいる。	３１人 ①１０　②２１	３２人　**＋1** ①１３　②１９
英語で自分の考えや気持ちを話すことは好きですか。	２９ ①８　②２１	３１　**＋2** ①１１　②２０
英語で自分の考えや気持ちを話すことは得意ですか。	２０ ①６　②１４	２９　**＋9** ①１１　②１８
英語の授業で、誰かの役に立ったことがある。	２７ ①１１　②１６	３８　**＋11** ①１９　②１９

聞き手の積極的なサポートが話し手の自信につながると考えたが、「授業の中で、自信をもって英語での表現活動に臨んでいる」の項目においては、肯定的な回答への変容がわずかであった。一方で、「英語の授業で、誰かの役に立ったことがある」の項目では最も大きな変容が見られた。聞き手として相手を支える体験や、職場体験という共通のテーマの中で生まれた学び合いがこの結果につながったのではないだろうか。

・「コミュニケーションにおいて、話し手・聞き手の立場の時に大切にしていることは何ですか」の質問に対し、生徒の記述に変化がある。

以下のように、同一生徒の中でも、アンケートの記述内容に変化が見られた。特に聞き手として、大切にしている手段だけでなく、その目的について記述する生徒が増えてきたことが印象的である。

＜話し手として＞

１回目 →	２回目
ジェスチャー、強弱	自分が話して終わりではなく、相手の気持ちを考えて話す。
相手と目を合わせる。	強調したり、相手を巻き込むような問いかけをすること

＜聞き手として＞

１回目 →	２回目
あいづち、アイコンタクト	あいづちや、相手が言葉につまった時に**サポートすること**
うなずき、あいづちをする	あいづちやうなずきなどで、**相手に安心感を与えること**
目を合わせてうなずいたりして反応する。	あいづちをとるなどして、**話し手が話しやすい空気をつくる**ように意識している。
反応を伝える	アイコンタクトやうなずき、あいづちなどで、**相手に安心してもらえるように**気を付けた。
相手の目を見て聞く。	**相手が聞いてくれてると思うような態度で**聞くことを大切にしている。

(3) 成果と課題（○成果　△課題）

２(2)に示した研究テーマに迫るための手立てについて、それぞれにかかわる成果と課題について以下にまとめる。

①「言語外目標」の具体の設定→②二連アプローチの目標設定と振り返り活動について

○二連アプローチによる目標提示により、話し手、聞き手として臨まれる態度について「何のためにその手段をとるのか」が、生徒に少しずつ浸透し、目的意識をもって活動に取り組むようになったと感じる。また両側面についての振り返り活動を行うことで、目指すべき姿に対しての自身の課題を確認し、さらなる成長に向けて考える機会とすることができた。アンケートや振り返りへの記述の変容からも、生徒は高い意識をもって、授業や表現活動に取り組むようになったことが分かる。「学びに向かう力、人間性等」の涵養において、具体的に言語的目標、言語外目標を提示し、継続的に振り返り活動を行うことは有効であったと言えると考えられる。

△振り返りの際に、提示した言語的目標、言語外目標のどちらかの振り返りしか行えていない生徒もいた。振り返りの時間が不足していたことが原因だと考えられる。しかし、これ以上の時間の延長は難しいため、その授業における重点事項を決め、優先順位をつけて振り返りを行うなど、形の改善をしていきたい。

△今回、言語外目標の具体の設定を行ったが、その妥当性については検証し切れていない。１つの単元の中で意識させることができるのはごく一部であった。今後、年間の CAN-DO リストに基づいた評価規準を作成する際に、計画的に指導していく中で、さらに検証を続けていきたい。

③生徒同士による相互評価活動

○ルーブリックを共有し、実際に活動の中で用いたことで、評価基準と評価規準を常に意識しながら、帯活動やパフォーマンステストへの練習に取り組むことができていた。また、生徒同士での練習は、繰り返す中で緊張感が緩みがちになるため、評価されるという経験は、本番を意識して取り組む良い機会になっていたと思う。

△上記 5(2)生徒の自己評価結果からも分かるように、適切に評価活動を行う難しさを感じる生徒も多くいた。そこには、英語能力の差や人間関係など様々な要因が存在すると考えられる。実際、お互いに気を遣って甘い評価をつけるペアが多く見られた。相互評価活動の本来の目的を果たすため、形を改善していく必要がある。具体的には、生徒同士での相互評価はコメントのみとし、ルーブリックを用いた評価は、教師の例やＶＴＲなど第三者に対して行うようにしていく。このようにして、今後より良い形を検討していきたい。

④教科横断的な課題設定

○「職場体験の発表」という課題においては、必要とする語彙や表現が生徒間で共通することが多いため、積極的に教えたり、質問したりして学び合う姿が見られた。また、総合の授業内では発表する機会がなかったレポートの内容を、ＡＬＴの先生に伝えるという共通の目標は、全体の意欲向上にもつながっていたと考えられる。教科横断的な課題設定は、生徒の学び合いの活性化や意欲を高めるために有効であったと言えるのではないだろうか。

△生徒は、レポートとして一度完成させた文章へのこだわりが強く、そのままの形で英訳しようとして苦戦する姿が見られた。帯活動などの既習表現を活用できるように、異なる表現に言い

換えることを促したが、自身の伝えたいメッセージが薄まってしまうことを残念がる生徒もいた。どちらにせよ、スピーチの内容面における達成感は低かったように思う。このように、教科横断的な課題設定は、生徒の思いを具現化した材料がすでにあるというメリットもあるが、このようなデメリットにつながる危険もあるということを感じた。

(4) 今後に向けて

２連アプローチによる目標提示と振り返り活動のサイクルによって、生徒の活動への目的意識が高まり、継続することで「学びに向かう力・人間性等」の涵養につながる可能性を感じることができた。曖昧になりがちな項目であるからこそ、教師が単元内で伸ばしたい側面を明確にもち、意識して指導計画を立て、評価していくことが大切であると実感した。また、単発の指導では、効果は期待できないため、３年間の中での計画的な指導が必要不可欠である。今後、上記した課題を克服できるように工夫を重ね、実践を積み重ねていきたい。

＜参考・引用文献＞

・松沢 伸二、三浦 孝、峯島 道夫(2018).『特集「学びに向かう力,人間性等」の指導と評価を考える』掲載誌『英語教育』　東京 ： 大修館書店

・松沢伸二(2021).『学習指導要領の主旨を実現する教科指導』（令和３年６月１日　県立教育センター主催「教科リーダー育成講座　外国語科　研修資料」）

・文部科学省(2014).『育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会― 論点整理―について』(平成26年３月31日)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/095/houkoku/1346321.htm

・文部科学省(2017).『中学校学習指導要領（平成29 年告示）解説 外国語編』 東京：開隆堂出版